

大学生の友人関係に関する社会的スキルと 登校回避感情の関係に関する青年心理学的研究

学校教育学専攻
学校心理学コース

M10034B

鈴木 真波

問題と目的

小学校・中学校で不登校が大きな問題となって久しい。しかし、子どもを取り巻く社会的状況は変化しており、それに応じて不登校の様態も変化すると考えられ、登校拒否を含む不登校全般に対して、明確な定義をくださるのは難しい。

社会学的な観点から不登校を検討した森田（1991）は、欠席も遅刻・早退も示さない出席生徒にみられる「学校に行くのが嫌だ」という気持ちを“登校回避感情”とよんでいる。

そこで本研究では、登校しない、したくてもできないという不登校を検討するのではなく、学校に行きたくないという感情について検討することが問題を直截的にとらえるには適切と考えた。

大学においても不登校の学生は相当数に上っている。小柳（1999）は、大学における不登校のきっかけや維持要因として、人間関係や情緒的混乱などの心理的問題が大学生活での適応に関連していることが理解されるという。このような大学生の心理的な問題の解決のためには、他者と適切かつ効果的に人間関係を構築していくための技能である社会的スキル（松永・岩本，2008）の獲得がその一つの方策であると考えられることができる。

そこで、本研究では社会的スキルを、他者とのコミュニケーション能力と定義し、大学生の友人関係に関する社会的スキルの水準が、大学生の大学への登校感情に及ぼす影響について検討することを主たる目的とした。

方法

研究協力者

静岡県下のA大学の1、2年生179名（男子77名 女子102名）が本研究の調査協力者として参加した。調査協力者のうち完全回答者の176名（男子77名 女

子99名）が分析対象者となった。

材料

質問紙は曾山・本間・谷口（2004）が開発した「友人関係に関する社会的スキル尺度（34項目）」、渡辺・小石（2000）により開発した「登校回避感情尺度（26項目）」をそれぞれ大学生用にふさわしい言葉遣いに一部修正したものによって構成された。なお、これら2種類の尺度に対する反応は、あてはまる（5点）～あてはまらない（1点）の5件法により求められた。

結果

友人関係に関する社会的スキル尺度の因子分析

友人関係に関する社会的スキル尺度34項目に対して、因子分析（主因子法—バリマックス回転）が実施された。その結果、5因子が抽出された。このうち、十分な内的整合性を有した、第1～第3因子までが分析の対象となった。各々の因子に含まれる内容の項目を考慮して、第1因子は「集団への参加技能」、第2因子は「向社会的技能」、第3因子は「他者への配慮技能」と命名された。

登校回避感情尺度の因子分析

登校回避感情尺度（26項目）に対して、因子分析（主因子法—バリマックス回転）が実施された。その結果、3因子が抽出された。各々の因子に含まれる項目の内容を考慮して第1因子は「友人の拒否」、第2因子は「教師への反発」、第3因子は「学校への反発」と命名された。

友人関係に関する社会的スキルと登校回避感情の関係

上述の分析結果に基づき、友人関係に関する社会的スキル尺度の3つの下位尺度ごとに、それぞれの平均値とS.D.に基づいて、各スキル高得点群（H群、平均得点+1/2S.D.以上）とスキル得点低群（L群、平均値-1/2S.D.未満）、および中間群（M群、H群にもL群とも属さない）の3群に分類された。そこで、表1に

に基づき登校回避感情尺度の各下位尺度得点を従属変数、性と友人関係に関する社会的スキル尺度の各下位尺度得点水準を独立変数とする2(性)×3(社会的スキルの各下位尺度得点水準)の2要因分散分析を行った。

登校回避感情尺度の「友人の拒否」得点を従属変数とし、性と集団への参加技能水準を独立変数とする2要因分散分析を行ったところ、集団への参加技能水準に主効果がみられ($F_{(2,170)}=151.56, p<.01$)、下位検定(Tukey法、以下も同様)の結果、L群>M群>H群(不等号は2%水準で有意差があることを示す。以下同様)という関係で有意差が認められた。次に、「友人の拒否」得点を従属変数とし、性と向社会的技能水準を独立変数とする分散分析を行ったところ、向社会的技能水準に主効果がみられ($F_{(2,170)}=49.94, p<.05$)、下位分析の結果、L群>M群・H群という関係で有意差が認められた。性の主効果も有意($F_{(2,170)}=26.71, p<.05$)であり、女性より男性の方が有意に回避的であることがわかった。なお「友人の拒否」得点を従属変数とし、性と他者への配慮技能水準を独立変数とする分散分析を行ったところ、有意な主効果、交互作用はみられなかった。

登校回避感情尺度の「教師への反発」においても同様の分散分析がなされたが、有意な主効果、交互作用はみとめられなかった。登校回避感情尺度の「学校への反発」得点を従属変数とし、性と集団への参加技能水準を独立変数とする分散分析を行った結果によれば、集団への参加技能の水準に有意な主効果がみられ($F_{(2,170)}=27.52, p<.05$)、下位検定の結果、L群>M群>H群という関係で有意差が認められた。性に主効果がみられ($F_{(2,170)}=73.41, p<.05$)、女性より男性の方が有意に高かった。次に、「学校への反発」得点を従属変数とし、性と向社会的技能水準を独立変数とする分散分析を行ったところ、性に主効果がみられ($F_{(1,170)}=20.24, p<.05$)、女性より男性の方が有意に高かった。なお「学校への反発」得点を従属変数とし、性と他者への配慮技能水準を独立変数とする分散分析を行ったところ、有意な主効果、交互作用はみられなかった。

表1 社会的スキル下位尺度別の性と群の登校回避感情得点平均及びS.D.

	群	性	N	友人の拒否		教師への反発		学校への反発	
				mean	S.D.	mean	S.D.	mean	S.D.
集団への参加技能	L	男	29	24.21	4.47	13.21	3.48	20.93	6.28
		女	25	22.88	6.56	13.64	4.22	18.52	5.46
	M	男	28	19.11	4.56	12.68	3.97	19.29	4.83
		女	35	18.29	5.26	12.29	4.04	17.34	4.33
	H	男	20	16.15	7.20	12.50	4.63	18.45	5.91
		女	39	14.00	3.03	12.92	3.26	16.85	4.58
向社会的技能	L	男	30	22.70	6.17	14.00	3.88	19.70	6.20
		女	21	20.57	7.62	13.33	3.77	16.67	4.22
	M	男	28	18.71	5.60	13.07	3.45	19.11	4.88
		女	39	17.54	5.69	12.82	3.52	17.69	4.93
	H	男	19	18.68	6.19	10.63	3.99	20.53	6.22
		女	39	16.46	4.90	12.69	4.14	17.62	4.86
他者への配慮技能	L	男	20	22.95	6.79	14.25	3.74	21.10	6.00
		女	35	18.89	7.09	13.00	3.03	17.26	4.22
	M	男	38	20.03	5.47	12.53	3.61	19.84	4.78
		女	30	18.90	5.20	13.20	4.25	18.13	5.04
	H	男	19	17.89	6.20	11.95	4.54	17.89	6.86
		女	34	15.59	4.93	12.47	4.15	17.03	5.01

考察

本研究の分析結果より、社会的スキルの下位領域すべてが登校回避感情に結びつくわけではないが、いくつかの下位領域は登校回避感情に結びついていることがわかった。

社会的スキルの他者への配慮技能は、どの水準群間にも登校回避感情得点の有意差は認められなかった。登校拒否の発現後に生育歴などを分析すると、彼らは「みんなのお手本」として期待に応えることに努力し、彼らの内面には心理緊張と過分の自己統制による精神的疲労が積み重なっていると佐藤(1996)は報告している。今回の結果からも、他者への配慮技能があるからといって、登校回避感情が軽減されるということはいえなかった。佐藤(1996)にしたがうならば、他者への配慮技能は、むしろ、その技能を豊かに有している方が登校拒否に陥りやすいと考えられる。

以上のことから、社会的スキルは全てが登校回避感情の軽減に効果を有するわけではないということが示唆された。そして、登校回避感情を抱えている学生と、登校拒否の学生が抱えている感情は一致するとはいえないということが示唆された。しかし本研究では、中学生を対象とした尺度を大学生に使用しているため、今後大学生を対象とした尺度の作成を視野に入れる必要があると思われる。さらに、児童・生徒にも同様の結果が得られるかどうかを検討することは、今後の登校拒否問題の解決策や支援策を考える上でも有意義と思われる。

主任指導教員 浅川 潔司
指導教員 浅川 潔司